艦隊悪堕ち計画5
お前のモノは俺のモノ

「敵の待ち伏せで捕まってしまい、しかもこんな恥ずかしい格好までさせられるなんて…
でも仕方ないわ」
「約束は必ず守ってくださいね！
私のことは好きにしてかまわないから嵐には手を出さないでください」
「えっ？ブラをはずすのですか？…わかりました…」

「きゃっ！は、話には聞いていましたが本当にそれを私の膣内に入れるんですか！？」
「まっ、待ってください、私こういう事は初めてなので心の準備が…」
うぐ！！
「んっ、んうううーーー！はあっ、はあっ、本当に入ってきた…」
「脅されたとは言え、敵に私の始めてを奪われちゃった…」

「んっ、んっ、あっ、やだ、私の膣内にズボズボって出たり入ったりしてる…」
「なんで、気持ち悪くて嫌なはずなのに、段々体が熱くなってきてる」

「やだっ、何かくる！これがイクって事なの！？あんっ、ダメっ！それ以上動かさないで！」
「あっ、はあっ、んんぅっ！はぁんっ、はぅっ、あぁあんっ！やぁあんっ、ダメェッ！」

「はあっ、はあっ、止まった…本当にやめてくれたんですね…ありがとうございま…あぁん!!」
「なんで!?やめてくれるんじゃ!?はぁあんっ!さっきよりも激しい!」
「ダメっ、また私イッちゃいそう!あっ、あんっ、はっ、んぅんっ!」

ダメッ!!

あっ!!

イヤッ!!

「はあっ、はあっ、また止まった?あなたは一体何を企んでるんですか?」
「えっ、自分からお願いしない限りコレをずっと続ける!?
私は絶対にそんな事を言いません!あっ、あんっ!」

〜5時間後〜
「もうダメェ〜頭真っ白になって何も考えられない…」
「これ以上続けられたら私狂ってしまいます…」

おひっ

ガクガク

ぐぐ

ぐぐ

ぐぐ

ぐぐ

ぐぐ

お〜〜〜…
お〜〜〜…

「はい、イキたいです、お願いしますイカせてください！」
「えっ、それだけじゃ足らない？あなたに忠誠を誓う？えっ、でも……」

「イヤッ！抜かないで！わかりました、言います！言いますから！」
「私は…萩風はあなたのモノになります、あなたの命令には決して逆らいません！
だからお願いです、イカせてください！」

ドクドクドク

「えっ、なに？私の体が何かに包まれていく、でもなぜかしら、これすごく心地いい」
「男の人に服従するってこんなに気持ちいいんだ！」
「ごめんね嵐、私負けちゃった…でももう私、我慢できないの！」

ドクン

「…うふっ、うふふっ♪私、本当にあなたのモノになったんですね♥」
「わかります♥さっきよりも私の心も体もすべてがあなた…
いいえ、ご主人様を欲しがっています♥」

うっ♡

プル…

「ご主人様ぁ♥早く、私の卑しいおマンコをご主人様の極太おチンポ様でイカせてください♥」
「萩風の体の中までご主人様の所有物だって証を刻み付けてください♥」

ぴち。

びちゃ♥

びちゃ♥

「ああぁんっ♥気持ちいい♥気持ちいいですご主人様♥
おマンコをズボズボされるたびにご主人様への愛が溢れてきます♥」
「あっ、やぁんっ♥さっきよりもお汁がこんなに♥ご主人様ははしたない萩風はお好きですか？」

あんっ♥
イイッ!! スゴイ♥
あっ♥
あっ♥
パン!
パン!
ぱちゅ♥
ぱちゅ♥
パン!
パン!
ぐちゅ♥
ぐちゅ♥
ぐちゅ♥

「やんっうれしい♥ご主人様のためならいくらでも淫らに変わります♥」
「あっ、あっ♥あぁんっ、やっ♥はぁんっ♥
ご主人様ぁ、萩風もうイッちゃいそうです♥今度こそ焦らさずにイカせてください♥」

「あっ、あっ、あああああああああ
「はあっ、はぁっ、しゅごい♥イクっ
「それに私の膣内に暖かいモノが出て
私とご主人様の赤ちゃんを作る子種汁
「あぁぁぁぁぁんっっ♥
♥♥」
ってこんなに気持ちいいもの
る♥これが精液なんですね
なんですね♥」
ゾク♥
ゾク♥
はあ♥
はあ♥
「なんでこんなに素敵な事を我慢して
「あんっ♥ご主人様ぁ？まだ抜かない
萩風、まだまだ足りないです、もっと
てたんだろう？馬鹿ですよね私♥」
でください♥
いっぱいイカせてください♥」
イクぅぅぅ

「えっ、嵐のことはいいのかって？そうですね、
「嵐もきっと気に入ってくれますよ♥だってこんなに気持ちいいんですもの♥」
「大丈夫です♥嵐がご主人様に危害を加えないように私もお手伝いします♥」

「もしもご主人様に怪我を負わせたら、たとえ嵐でも容赦はしません♥」
「でもまずは私を食べてくださいね♥はい！めしあがれ♥」

「Pretty good chair～(ややややややや)が椅子(ぬ)かんぱの(ぬ)を甲斐があるのだ」
「You are honored, too? I am used to my chair～(あなたも光栄でしょう)」
「Oh? Are you dissatisfied? That's not true, is it?(あら)不満があるの、そんな事なんてあるわけ」
「So good～(やややややや)のだ」
「そんな事なんてあるわけ」

ガチャ

「Welcome Admiral♪びっくりしたかしら？
My Lordから今回の戦いのご褒美に椅子をもらったから見せてあげようと思って♪」
「Yes♪貴方とは別の……私が英国にいたころのAdmiral♪」

クスッ

「He was unlucky(彼は運が悪かったわ)、たまたま奇襲の日に視察に来るなんて♪」
「ふふっ♪Thanks to you I got a nice chair♪(でもおかげでいい椅子が手に入ったわ♪)」

「？Are you listening？Admiral(ちゃんと聞いてるの？)
……ってあら？Admiral？なんでそれ、大きくしてるのかしら？」
「私のpantiesを見て興奮しているのかしら？
それとも、この椅子がうらやましいのかしら？」

「いずれにしても私に対して不敬ね
こんな事のためにAdmiralをここに連れてきたわけではないのだけれど」
「まあいいわ、それ、出しなさい、私が特別に鎮めてあげるわ♪Admiral一人間最後の日ですもの♪」

「あら？なに、私のお口やおっぱいでしてもらえると思ったの？Admiralは足で十分よ♪」

しゅち

しゅち

しゅち

くりゅ

くりゅ

くりゅ

「私を好きにできるのはMyLordだけ♥
私のお口もおっぱいもおマンコもすべてMyLordのためにあるの♥」
「本当なら足でさえAdmiralに使いたくはないのだけれど
今日は特別♪Feel comfortable with my feet♪（私の足で気持ちよくなりなさい♪）女の足で弄ばれて喜ぶなんて変態ね♪
ほら、こんなにぴくぴくしてるわ♪」

「あら、我慢できずに射精してしまったの？これはいったいどういう事かしら。説明してくださる？」
ぴゅるるう
キッ
ドロォ…
「phew…Admiral, you know what you did?(なにをしたかわかってるの？)」
「誰が私の足にかけていいなんて言ったの？Admiralの汚いセーシで私の足が汚れてしまったわ」
「臭くて不快だわ、My lordのセーシとは大違い…」

「椅子、綺麗にしなさい！それとAdmiralには躾が必要みたいね
私を怒らせた事を後悔させてあげるわ」

「ココに呼んだ理由を話す前にそのおチンポ、徹底的に躾てあげるわ♪」
「Apologize if you cry.I will not forgive you♪(泣いても謝っても許してあげない♪)」

「あら、どこを見ているのかしら？私が本当に怒っているのをわかってるのかしら？」
「私のエッチな姿をジロジロ見て、さらにそのおチンポをギンギンに勃起させてしまうなんて…」
クスッ
プルンッ
「どうしようもない変態ねAdmiral♪わかっているのかしら？これは躾なのよ？」
「Admiralを裏切ってMy Lordのモノになった女の躾♪それでもうれしいの？」
ムチ…

「クスクス♪救いようがないわね♪
じゃあまた足で嬲ってあげるわ」
「んっ、どうかしら？さっきのやわらかい足の感覚と違って、無機質で硬いでしょう？」
「ヒールが擦れて痛そうね？でもこれが気持ちいいのでしょう？」
「だってAdmiralのおチンポ、うれしそうにピクピクしてもっとしてほしくしてあげるわ♪」
「If that is you, I will do more intense♪（それでしたら、もっと激しくしてあげるわ♪」

「んっ、んっ、Does it feel good? or is it painful?(気持ちいい？それとも痛いかしら？」

ぐりっ

「返事もできないなんて、もうわけがわからなくなってしまったのかしら♪」

頭の中がお馬鹿さんになってしまったのかしら♪」

「Will not stop?(でもやめてあげないわよ？)」

「WOW!おチンポ、痙攣してて苦しそう～クスクス♪」

「セーシ出そうになっても我慢しなさい、私が許可を出すまで決して射精してはダメよ？」

ガッ

ガッ

ガッ

ガッ

「No!また言いつけを守れなかったわね…
We are still short of discipline…(まだまだ躾がたらないわね…)」

クスッ

「Huh?そういえばココに来たわけをまだ言ってなかったわね」
「実はMy lordからご褒美でもらったのはこの椅子だけじゃないの
AdmiralもMy petとしていただいたのよ」
「でもこんなに言うこと聞かないPetだったなんて…
でも安心しないさい、ちゃんといい子になるまでセーシ出し尽くして
おチンポが苦しくなっても躾を続けてあげるわ♪」

ぬーちゃあぁ

「わざわざ夜戦でしかも姉さんの戦術までマネて私を捕縛して、あなたは何が狙いなのですか！」
「いえ、それよりも、姉さんは無事なんですか？」
「姉さんがあなたに捕らえられているのはわかってるんです！皆さんは待ってる人たちがいるんです！」
「すぐに姉さんを解放してください！皆さんを解放してください！」
「えっ、帰りたいか直接聞くといい？何を言ってるんですか？」

「し～んつう～♪ひっさしぶり～♪」

「姉さん!?よかった、無事だったんですね!って、ひゃっ!どこ触ってるんですか!?」
「え～つれないなー、せっかく久々の姉妹の再会なんだしちょっと位スキンシップしてもいいでしょ～♪」
「ね、姉さん、こんな時にふざけないでください!それよりも早くここを出ましょう!」
「何言ってるの神通?これから神通の大切な改装をするんだから、逃げちゃダメだよ♪」
「ほら♪ご主人様のおチンポ、すっごい太くて気持ちよさそうでしょう?これで神通もご主人様の女に変えてもらうんだよ♪」
「姉さん!?何を言ってるんですか!?」

「だからさぁ神通？神通もご主人様の女になろ？
今より強くなれるし、それにとっても気持ちいいんだよ？」
「姉さん…私は負けません！絶対に姉さんを元に戻して連れて帰って見せます！」

「ひぐっ！！いやっ、私の中に入ってきた！？」
「あはは♪処女なのにすんなりご主人様のおチンポを受け入れられるなんて、やるなぁ神通♥」
「ね、姉さん、どうしちゃったんですか！？まさか洗脳されて…」
「ううん、違うよ、これは私が望んだこと♪私も最初は嫌がってたけど調教してもらってモノになりたいって思ったんだ♥」

スリスリ

「ふぅ、相変わらず強情だなぁ…でもそれは絶対に無理だよ♪」
「あっ！ああっ、あんっ、はぁあん！やめてっ、私の膣内をかき回さないで…ああんっ！！」
「負けないって言ってたわりに気持ちよさそうじゃん神通♪じゃあ追い討ち♪ぺろっ♥」
「ひゃぁっ！やめて姉さん！耳を舐めないで！あっ、ああんっ！ふわぁっ！」
「れろっ、れろっ、じゅるる～♥耳もおマンコも気持ちよくてイッちゃいそう？
くすくすっ♪神通は淫乱だなぁ♪」

「ふぇっ？なんで抜いて…」
「残念だったね神通♪ご主人様は神通が自分で望まないとイカせてくれないみたいよ？」
「な、何を言ってるんですか！？自分から敵にそんな事を頼むはずが！」
「ねえ神通？もう我慢しなくていいんだよ？いつも私や那珂に遠慮してる神通が少しくらい自分のしたいことをしても、誰も攻めないよ♪だからさぁ、自分に正直になりなよ♪」
「私のしたいこと……ゴクッ」
すぽんッ

「お願いします、イカせてください…」
「ダメだよ神通う～そんな小さい声じゃあご主人様に聞こえないよ～♪」
「お願いします！私のおマンコをめちゃくちゃに突いて私をイカせてください！」
もう我慢できないんです！」

「ぷっ、あはは♪言っちゃったね神通？これで神通も私と同じご主人様の"モノ"に変われるね♪」
「あっ、自分に素直になるのってとっても清清しいんですね、姉さん…」

ズリ
ズリ
ズリ
ズリ

「ようこそ神通〝こっちの世界〟に♪どうどう？すごいでしょ♪」
「くすっ♪ええ、姉さん❤姉さんが帰ってこなかったわけがやっとわかりました❤」
「こんなにも強力な力とご主人様への愛情に溢れれば帰るなんて選択肢は最初からありませんよね❤」
「そゆこと♪やっと神通もわかってくれたね♪じゃあさ、早速ご主人様にかわいがってもらいなよ♪」

「はい❤先ほどの様々な失礼な事、どうかお許しくださいご主人様❤
これからは誠心誠意お仕えいたします❤」
「まずは私のいやらしいおマンコで精一杯ご奉仕いたします❤」

「あっ、ああんっ♥すごい！先ほどとは比べ物にならないくらい気持ちいいです♥」
「わあ、神通のエッチな涎がどんどん溢れて、ご主人様のおチンポがすっごいテカテカしてる♪」
「あんっ、姉さんったら♥私の体はもうすべてご主人様を喜ばすように変わったんですから当たり前じゃないですか♥」
「うふっ♥それでは動かしますね、うまくできるかわかりませんが一生懸命がんばりますね♥」
「大丈夫♪私がちゃんとご主人様との夜戦の仕方を教えてあげるから♪」

「あんっ♥はあんっ♥どうですか姉さん？もう少し激しくしたほうがいいでしょうか？」
「ただ激しく腰を振ってもダメ、ゆっくりでもいいから腰をくねらせながら振ってみて♪」
「こ、こうですか？んっ、ああぁんっ♥これすごいです！ゆっくりなのに気をやってしまいそう♥」

あんっ♥

あっ♥

「最初はゆっくりこの動きを覚えて、なれてきたら激しくしてみるともう最高に気持ちよくなれるよ♪」
「ご主人様はどうですか？気持ちよくできてますか？私はもう…んっ、んっ、んんんんんんうううっ♥♥♥」

じゅぽっ♥
じゅぽっ♥
じゅぽっ♥
じゅぽっ
じゅぽっ

「あーあ、ご主人様の許可が出てないのにイッちゃダメじゃん！
でもご主人様もイッたみたいだし、気持ちよかったみたいだね♪」
「はあっ、はあっ、すみませんご主人様…次はもっとちゃんとご奉仕します…」
「じゃあさじゃあさ！次は私のおマンコも使ってよご主人様♥姉として神通に手本を見せないと♥」

とろ♥

「ずるいです姉さん、私も…ふふっ♪姉さん共々精一杯ご奉仕します♥
身も心もすべて捧げますから末永くかわいがってください♥」
「いずれ那珂ちゃんも…ふふふっ♥」

ドクドク

ゴポッ

ドク

「将校殿、渡された薬も飲みました、これでよろしいでしょうか？」
「本当にこれで強化改修ができるのでありましょうか？」
自分がいた鎮守府ではこんな改修方法はありませんでした」
「はあ、セーシ…というのでありますか？聞いたことがないであります」
「い、いえ、疑うなどとんでもない！ちゃんと上層部の証明書も見せていただきましたし上官に疑念を持つなど自分は…！」
？
「了解であります、今度はお、お尻をそちらに向けるのでありますね、失礼します」

「これでよろしいで……ひゃあっ!?な、なぜ服を脱いでいるのであります上官殿!」
「ソレ」から出るセーシを自分の体に注ぐのが今回の強化なのであります？」
「強化資材が出るとは男の方の体は不思議でありますね
……ということは提督殿からもセーシが出るのでありましょうか？」
「うむ、「ソレ」の名前は「おチンポ」というのでありますか、勉強になるであります！」

あわわ〜

「ところで将校殿？そのおチンポ殿は自分のどこから入れるのでありますか？」
「ええっ！？そこはオシッコを出すところであります！そんなもの入るわけがないであります！……」

「ひぐぅっ!!?ほ、本当に入ってしまいました…
将校殿、い、痛いであります…早くセーシを出し始めてください」
「えっ!?入れただけではセーシは出ない？ではどうすればいいのですか？」
「おチンポ殿を出し入れして刺激を与えればセーシが出るのであります
痛いでありますが早く終わるためであります！」
「んっ、んっ、なにか自分の内臓を抉られるような妙な感覚であります
将校殿、まだ出ないのでありますか？」

「えっ、早く終わらす方法がある？そんな方法があるなら是非して欲しいであります！」

「んっ、あぁんっ!!?なにをするのでありますか将校殿!?そんなに激しくしたら息ができな…」
「これが早く終わらす方法?…わかりました、苦しいですが我慢いたします」
「あっ、あっ、あんっ、あふっ!ん、はあぁんっ!!」
「おかしいであります、なんだかだんだん痛みが消えて気持ちよくなってきたであります…」

おっおっおっ

んっ

「どうでありますか将校殿、そろそろ出そうでありますか?
おチンポ殿も自分の中で激しく脈打ちはじめたであります!」

「えっ!?あっ、あああああああんっっ!!!」
「はあっ、はあっ、熱い……であります、
それにドボドボ出てきて自分のお腹の中を満たしていくであります……」
「なぜでありましょうか、お腹は満タンなはずなのに、なぜかもっと欲しくてお腹が切ないであります」
「将校殿!無理を承知でお願いであります、自分にもっとセーシを注いで欲しいであります!」
「条件……でありますか?その条件を飲めばセーシをもっと下さるのでありますね!」
「……えっ!?そ、そのような条件飲めるはずがないのであります!」

「えっ、いや！抜いちゃダメなのであります！…わ、わかりました言うであります！
言うでありますから抜かないで欲しいであります！」
「自分は提督殿の元を去り将校殿にお仕えするであります
軍でも提督殿でもなく将校殿に忠誠を尽くすであります！」
「でありますから将校殿！おチンポ殿を自分にもっと入れて欲しいであります！」
「ひゃっ、何でありますかこれは！？自分をさらに改装する…のでありますか？」

「いいえ、将校殿がおっしゃるなら自分はかまわないであります
それになんだかこの感覚、心地いいであります…」

「……んっ、なんでありましょうか、先ほどとは比べ物にならない位力を感じるであります！」
「これが将校殿の強化改修のおかげなのであります！すごいであります♪」
「えっ…そうでありますね、将校殿はもう自分の絶対的存在になったのにその呼び名はふさわしくないであります♪」
「ではこれからは、主殿、と呼ばせていただくであります♥」
「主殿♥自分は約束を果たしたであります、ご褒美にセーシを恵んで欲しいであります♥」

「あっ、あああぁぁあああああんっっ♥♥入ってきたであります♥
先ほどと違っておチンポ殿の形もはっきりわかるであります♥」
「こんなに気持ちいい改装があったなんて♥軍も提督殿も教えてくれなかったであります♥
感謝であります主殿♥」
「んっ、どうしたのでありますか主殿？」
「えっ、実は主殿はもう将校ではない？深海側と手を組んで軍と敵対する裏切り者！？
…自分を騙していたのでありますか主殿……」

ゾク♥
ゾク♥
ゾク♥
ぢゅぷんっ♥

『……ふふっ♪』

「そんな事関係ないであります！自分は主殿のモノになったのでありますから
主殿がいれば何もいらないであります♥」
「主殿が人類の敵だったとしても自分はもう主殿の部下、どこまでもついて行くであります♥」
「あぁあんっ♥あんっあんっ♥はあっ、あはぁんっ♥♥
いいであります主殿！所有物の自分を壊れるほど激しくお使いください！」
「はあっ、はあっ♥はあんっっ♥ズポズポされるの気持ちいいであります♥
主殿も気持ちいいのでありますか？」

あん♡
はっ♡
お♡
じゅぽ♡
じゅぽ♡
じゅぽ♡
じゅぽ♡
じゅぽ♡
パン
パン
パン

「はぁっ、あんっ♥主殿、自分の中で何かきそうであります！？
…これはイクということなのでありますね！」
「主殿！イキそうであります♥主殿もセーシを自分の中に出してください♥」

「イク！イク！イッぐうううううううううっっ♥♥♥はあっ♥はあっ♥」
「す、すごいであります♥自分のお腹の中、いっぱいになりすぎて破裂してしまいそうであります♥んんっ！溢れてしまってもったいないのであります…」
「イクとは素晴らしい事でありますね♥主殿、もっともっと自分をイカせて欲しいのであります♥」

ハッッ♥♥♥

ドプッ

ブビビビビ

「…提督殿を捕まえてくればご褒美にまたセーシを注いでくれる？本当でありますね♥」
「了解したのであります♥主殿のご命令ならこのあきつ丸、"元"提督殿にも容赦しないのであります！」

「てめぇがここの親玉か？まったくいい趣味してるぜ、拘束しないと女一人まともに相手できないなんてな！」

「龍田達をどうやって操ったかは知らねえが、オレ様はてめぇみたいな豚野郎のすきにはならないぜ！」

キッ

「早いとこ龍田達を自由にしないと痛い目見るぜ、おっさん！」

「なにニヤニヤしてやがんだ？怖くて気でも狂ったか？」

『な！ななななに服脱いでんだてめぇ！？』
（提督のモノとまったく違うじゃねえか！？こんなに大きくなるのか！？）
ギュッ
『はあ？これを咥えろだって！？馬鹿言ってんじゃねーよ！』
『その汚ねえモノを近づけるんじゃねぇ！噛み千切るぞ！！』

「オレの体に勝手に触るな！」
「クソっ、体の自由がきけばすぐにてめぇみたいな雑魚なんてぶっ殺してやるのに！」
「んんっ！やめろ、先っぽイジるな！そこは敏感…あんっ！」
「痛っ！やめろ、胸を引っ張るな！」
「い、今の声はなんでもねぇよ！…はあ？
オレが胸しかイジってないのに感じてる変態だと！？ふざけんな！」
「すぐに自分でも自覚できるようにしてやるだと？てめぇ、なにする気だ…」

ガニニ

「ん、んんんんっ！？？ぢゅ…ちゅぢゅるるるるっ！
ぢゅっちゅ、ぢゅっちゅ、ぢゅっぢゅっ！！」
「ぷはぁっ、けほっ、けほっ、いきなりなにしやがんだ！んっ…んんー…んっ！？」
「っ、んっ…んんっふ！？やめ！じゅる！
息が…じゅるるるるっ！　じゅずずずずっ…んっ！　んっ！」

ぢゅぽっ
ぢゅぽっ
ぢゅぽっ
ぢゅぽっ

（なんだ、こんなに汚ねえモノを無理やり咥えさせられてるのに体が熱く…
ダメだ、このままだとイッちまう！）
「じゅっぽじゅぽっ、ちゅ、ちゅぶっ！
じゅっぽじゅっぽ、んっ、んんっーーーーーっ！！？」

「んぐ、んぐ、はぁっ、はぁっ…
なんでだよ、こんな嫌なことされてるのに、しかも下は触ってもないのに…」
「あんっ！やめろ、そんなに胸をイジられたら
またイッちまう！んっんんーーっ！！！」
「はあっ、はあっ、なんでだよ、こんなにイッたのにまた下半身が疼きやがる…」
「えっ、この疼きをなくすにはてめぇの
改装を受けるしかないだと！？馬鹿いってんじゃねえ！」

《こいつの改装なんか受けたら龍田達みたいになっちまう…でも
…そうだ、改装されても自我さえ保ってれば反撃のチャンスはあるはず…》
「ちくしょうっ！改装したけりゃ勝手にしやがれ！ただ後悔しても知らねえぞ！」

ぱみゅっ。

ドクン

（本当にオレの体が作り変えられていく…？頭もぼーっとしてきやがった…）

（ダメだ天龍、正気を保て！ぜってぇこいつのすきにはさせてたまるか！）

「んんっ、くうっ、あんっ…フフッこの程度か、たいした事ないな！」

「オレを強化したことを後悔させてやる！泣いても謝ってももう遅いからな！！」

「……」
「すげぇ力だ！今なら誰にも負ける気はしないぜ！」
それと残念だったなおっさん、オレの体は改造できても
頭の中まではイジれなかったみたいだな！」
「フフフ……」
「言ったとおり、今すぐこの拘束を解いて、てめぇをブッ殺してやるからな！！」
「な、なんでまたチンポおっ勃ってんだよ！？やめる、もうそんな汚いのを近づけ……」

「ぱくっ、じゅっぽ！じゅぽっ！じゅぽっ！ぬっぷ、ぬっぶっ…じゅっぽぉぉーーー！？」
（なんだ、体が勝手に！？チンポの臭いを嗅いだだけでオレの体がアレを欲しがってる！？）
「じゅっぽ、じゅぽじゅぽ、ちゅ…ちゅっぽおぉ～～！じゅぽっ！　じゅぽっ！」

ギュルルルルル
ビゅるゝ
ギュポ
チュポ
チュポ
ジュポ
ジュポ

（さっきまで吐きそうな味だったのに、美味く感じる！？もっと！もっと欲しい）
「ちゅ、ちゅぢゅるるるるーー！ぢゅっづ…ぢゅっ！
ぢゅうぅぅーーー！じゅぽじゅぽーーー！」

「んっ、んんんんーっ！！んんっ、んんっ…んぐ、んぐ…」
（はあっ、はあっ、これもだ、濃厚で喉に絡み付いて今まで食ったどんなものよりも美味い…）
「おいあんた、まだおっ勃ってんだったらまだ出せるよな？その…もっとオレに精液飲ませてくれ！」

ぢゅっ
ぢゅっ

ズゴゴゴ

「じゅっぽ！じゅぽっ！じゅぽっ！これだよこれ！これが欲しかったんだよ♪
ちゅ、ちゅぢゅるるるるーーー！」
「んっ！なんだ、またオレの胸をイジるのか？フフ
いいぜ俺の胸ももうあんたのモノなんだからな♪」
「じゅっぽじゅっぽ、ぬっぽっ！じゅっぽじゅっぽ…
じゅず、じゅるるる…じゅずずずずっ！」

ギュルルルルルッ
じゅるっ
ジュボ
ジュボ
チュポ
チュポ
チュポ

（提督すまねえ、もうオレはもうチンポのことしか考えられない変態になっちまったみたいだ
でもしょうがねえよな）
（こんなずげぇチンポ、
提督のお子様チンポじゃぜってぇ敵うはずがねえよ、だから悪いな提督）

嵐「クソッ体が思うように動かねえ、これはどういうことだ萩！俺に何を飲ませやがった！」
萩風「クスっ♪ダメでしょ嵐♥いきなりご主人様に攻撃を仕掛けようとしちゃ♪」
「安心して♪別に毒じゃないわ♥ちょっと副作用はあるけれど、ただ体の自由がきかなくなるだけよ♪」
嵐「ご主人様って…どうしたんだよ萩！どうしてこんなヤツに従ってるんだ！」
萩風「それはね、私がご主人様のモノになったからよ♥
ご主人様が命じたら私はどんなことでも喜んでするわ♥」

キッ

嵐（クソッ体が自由に動けばすぐにこんなヤツ倒して、萩の目を覚ませることができるのに！）

嵐「！？なんだ、急に股の辺りがムズムズしてきた！？」
萩風「あら？さっきのお薬の副作用みたいね♪触ってもないのにこんなに早速改装してもらえるみたいよ♪」
嵐「なんだよこの気持ち悪いモノ！？大きくなってしかもピクピク動いてる！？」
萩風「ダメよ嵐そんな事言っちゃ、こんなに愛おしいモノなのに…ふっ♪これが今から嵐のおマンコに入るのよ♥」
嵐「なっ！そんなデケェモノ、入るわけないだろ！おい、やめろ！ソレを近づけるな！！」

嵐「ん。っ、うぐぐうううっ!!!ほっ、本当に入れやがったな！」
萩風「嵐も処女をご主人様に捧げれてよかったわね♥
ほら、こんなにズッポリおチンポを咥えこんでるわ♥」
嵐「何がおめでとうだ…こんなの痛いだけで何がいいんだ！」
萩風「うふっ♪痛みは最初だけ♥すぐに気持ちよくなって他の事なんかどうでもよくなるわ♥」

嵐「そんなわけ…んっ、んんうっ！やめろ動くな!!あっ、あうっ！」
萩風「ああ、あんなにおチンポが出たり入ったりして羨ましい♥
ご主人様ぁ♥私もおマンコが切なくなってきましたぁ♥」

づ!!

ズリ
ズリ
ズリ

嵐「あんっ、あんっ、ふっ、うんっ！そ、そんな事ない…あぁんっ！」
萩風「嵐ったら強がってもバレバレよ♪気持ちよすぎてもうイッちゃいそうなんでしょ？ご主人様、嵐はもうイキそうなので是非嵐の中にタップリ射精してあげてください♥」
嵐「中にって…まさか！あ、あぁんっ！やめろ！今すぐソレを抜け！あん、はあんっ！」

萩風「お顔、失礼しますねご主人様♥あんっ、ご主人様におマンコペロペロされてとっても気持ちいいです♥ほら、嵐もだんだん痛みが消えて気持ちよくなってきたでしょ？」

あんっ♥

ガバっ

グイ

嵐「あっ、あっ、あ゜あ゜あああああああああああんっっっ！！！」
「はあ、はあ、はあ、なんだこれ…一瞬気を失っちまった…」
萩風「すごいでしょ♪こんな快感知ったら、もうこれなしでは生きられないわ♥」
「ねえ嵐、気持ちよかったでしょ？
もし嵐が私と同じようにご主人様にすべてを捧げればいつでもこうやって愛してもらえるのよ？」

嵐「いつでも…なっなに言ってんだ！俺はこんなヤツの言いなりになる気はねえぜ！」
萩風「んもう、嵐ったら素直じゃないんだから」

萩風「いいの？もしここでご主人様を受け入れなかったらもう一生この快感は味わえないわよ♪」
「嵐が本当は司令を好きなのは知ってるけど、ご主人様を知った以上絶対司令のおチンポじゃイクことはできないわ」
嵐「一生イクことができない…？もうこの快感を味わえない…？…そんなのやらぁ…」
萩風「イカせてくれない司令といるよりもいつでもイカせてくれるご主人様にすべてを捧げたほうが嵐にとってもきっと幸せなことのはず♪」
嵐「……」
嵐「……わかった、俺はもう一度あの快感を味わいたい！こいつに…いやご主人様に俺のすべてを捧げてやる！」
萩風「そうよ嵐♥嵐ならきっとわかってくれると思ってたわ♥さあ、ご主人様を受け入れて♥」

嵐「……へへっ♪なんだよこれ！体の奥からすげぇ力を感じるぜ！」
萩風「うふふっ♪おめでとう嵐♥これで嵐もご主人様の忠実なメスね♪
そのエッチな服もとっても似合ってるわ♥」
嵐「ああ、俺は何でご主人様を拒んでたんだ？こんなに気持ちいいのに♪」

萩風「うふふっ♪最初はみんなご主人様のメス奴隷に堕ちちゃうの♥」
嵐「ああ、わかる気がするぜ♪だってこんなすげぇ快感味わったら、誰でも堕ちないわけがないもんな♪」
「ご主人様！あんたのモノになった俺にまたそのぶっといチンポを挿入してくれよ♪」

嵐「あっ、あああぁんっ♥♥きたぁっ♥また俺のマンコにチンポが入ってきた♥さっきよりも断然気持ちいいぜ♥」

萩風「あんなに気持ちよさそうに、羨ましい♥えっ!?あっ、はあぁぁんっ♥また舐めてくださるのですかご主人様ぁ♥」

嵐「あっ、あんっ♥うんっ、やっ、あぁんっ♥♥萩の声、すげぇエロくて俺まで興奮してくる!あぁんっ♥」

萩風「だってご主人様の舌使い、とっても気持ちいいんですもの♥はぁんっ♥そこっ、気持ちいいです♥」

嵐「あんっ、あんっ♥…ふぇ?もっとすごい快楽を教えてやる?どうすんだよご主人様?」

あっ♡

ジュプ

ジュプ

ジュプ

あんっ♡

嵐「えっ！？あっ、ん。んんんんんんっっっ♥あ。っ、あ。っ、あ。っ、♥激しいっ♥おっ、おおんっ♥」
萩風「あああんんんんっっ♥♥すごい♥ご主人様の舌が蛇みたいに激しく動いてる♥ああんっ♥」
嵐「あ。っ♥ダメだ、気持ちよすぎて頭バカになるっ♥ああんっ、はっ、はあんっ♥」

お。♡ おおん。♡

おっ♡ おほっ♡

イクッ♡

萩風「私も、もう何も考えられない♥んんうっ、ああんっ♥
気持ちよすぎてお汁止まらない！止まらないのおっ♥♥」
嵐「あっ、あ。あっ♥俺、もうイッちまう！萩いっ！ご主人様！一緒に！一緒にイッてくれ♥」

二人「あ゛っ、あああああああああああんんんんっっっ♥♥♥」
嵐「っ、はあっ♥はあっ♥俺の体全部が弾けるみたいな最高の気分だぜ♥」
萩風「はあっ♥はあっ♥ええ、私もとっても気持ちよかったですご主人様♥でもご主人様はまだ満足してないみたいですね♥」
嵐「へへっ♪さすがだなご主人様♥じゃあ次は俺と萩で交互にチンポ入れてもらおうぜ♥どっちが気持ちいいマンコか勝負だ！」
萩風「うふふっ嵐ったら♪もう完全にご主人様のおチンポにはまっちゃったみたいね♪司令が知ったら泣いちゃうわよ？」
嵐「いいんだよ、あんなフニャチン野郎！それよりまだまだ俺たちと一緒に楽しもうぜご主人様♥」

「今日も…ですか、あなたもしつこいですね…」
「あなたに捕まってから何度も抱かれましたが、私はこのような事をするような人に仕える気はありません」
「さあ、今日も私を犯すのでしょう？早く終わらせてください」
ジャラ

「きゃっ！…まったく乱暴ですね
毎度私に新しい服を与えてそのたびにこうやって
無理やり破るなんて…」
「女性はあなたのオモチャではありません
少しは女性の扱いを勉強したほうがいいですよ？」
ビリッ
ビリッ
ビリッ
「と言っても、そんな事を言っても無駄ですか…
さあ、いつものようにその汚らわしいモノで
私を貫けばよろしいです」
「でも絶対に私はあなたに屈しません
私は必ず皆さんの元へ帰ります！」

（んっ！んんうっ！！あんっ！大きい…
何度されてもこの感覚はなれません…）
「どうしたのですか？いつものように好き勝手に突いたらどうです？
それともやっと私を解放する気になりましたか？」
「えっ！？あっ、ああんっ！！な、なんのつもりですか！？
あんっ！ダメェ、そんな私の弱い所ばかり…あっ、やあんっ！！」
「あっあっ、はぁんっ！あぁんっ！
や、やめてください…あんっ！そこダメです！そんな奥ばっかり…」
「ダメェっ！私もうイッちゃいます！
あっ、んっ、んうーーーーっっっ！！」

「…ッ、はあっはあっ、また中に出され……ふぇ？」
「い、いえ！中のほうがよかったなんてそんな事！
…あるはずがありません…」

びゅん、
びゅるるる、

ぴくぴく
あっ
はあっ
はあっ
ぴくぴく

（中に出されなくてよかったはずなのに、なんなんですかこの虚無感は…）

「えっ、今日はもう終わり？いつもなら朝まで抱かれ続けるのに？
いえ、もっとして欲しいなんて、そんな事思うはずが…」
《頭ではダメとわかってても、この人に開発されてしまった
私の体が欲しがってる、中に射精されたいと望んでる…》
「えっ、自分に正直になってあなたを受け入れたら
私の望むままに犯してやる？な、何を言ってるですか！」

《こんな誘い受けれるはずが…
でも体の疼きが収まらない…ダメ、おマンコにまた入れて欲しい…》
「……本当にあなたのモノになったら
もっと犯してもらえるんですか？」

ぬちゃぬちゃ

「……わかりました、私は今からあなたの
…いえ、ご主人様のモノになります」
「仲間も姉妹も自分の快楽欲しさに裏切ってしまった最低の艦娘ですが
そんな私でよろしければご主人様のメス奴隷にしてください」

ゴゴゴ

ゴゴゴ

(あぁ、言ってしまった…姉さん、お冬さんごめんなさい…
私はもう皆さんの所へ帰る資格はないみたいです…)
「これの黒いモノは?…そうですか、私変えられてしまうんですね
…艦娘にも戻れない体に…」

「うふふっ♪これで私は完全にご主人様のモノになったのですね♥」
「不思議ですね、先ほどまでは皆さんを裏切ってしまった罪悪感でいっぱいだったのに、それが今ではゾクゾクしてしまいます♥」
「改めて、ご主人様専用メス奴隷艦『涼月』です♥ご主人様をお護りする盾としてまたいつでも犯していただける肉便器として、よろしくお願いします♥」

うふ♥

「それで早速ですが、私の発情しきったはしたないおマンコを犯していただけないでしょうか…うふふ♪ありがとうございます♥」

「あっ、あああああんっ♥来ました！
ご主人様の大きなおチンポが私のおマンコを掻き分けながら
入って来ました♥」
「先ほどと違って、おチンポの形も熱も感じられて
この上ない幸福感です♥」

「私のおマンコも嬉しくてお汁が止まらなくなってしまいました♥
もっとご奉仕したくて中も勝手にヒクヒク動いてしまいます♪」
「ご主人様♥お好きなように私を犯してください♥
ご主人様が気持ちよくなっていただければ私も幸せですので♥」

「はあんっ、あっ、はぅっ♥あっあっ…やぁんっ♥
力強くてたくましいですご主人様♥」
「あんっ、また私の弱い所ばかりを♥自分だけではなく
私にまでお気を使っていただいて…うふっ♥お慕いしていますご主人様♥」
「あんっ、そこです♥そこグリグリされるの大好きなんです♥
ご主人様のモノになる前からそこを刺激されるといつもイッてしまって♥」

「ご主人様、イッてしまいそうですか？実は私も♥今度は是非
その貴重なご主人様の精液を私のおマンコに注いでください♥」
「あっ、あっ、イク！激しく突かれて私もイッてしまいます――――！！！」

「はっ、ああああああああああああああああああああああんっっっ♥♥♥」
「…ッ、はあっはあっ…うふふっ暖かいです♪
全身を貫くような快楽と体の中からご主人様に染められる幸福感♥」
「これを知ってしまったら女の子はみんな
ご主人様無しでは生きられない体に変わってしまいますね♪」

ビュビュ

ブッビュルビュビュ

「今度は私が上ですか？わかりました♪ご主人様がご満足なさるまで
いくらでも涼月の体をお使いください♥」
「私はこれからずっと、ご主人様専用のメス奴隷です、うふふ♥」

「こんな気持ちの悪い部屋に私を閉じ込めて何をするつもり？」
「新しい改修方法を試す？何を言ってるの！！くっ、ちょっと離してよ！
手足が触手で固定されて動かせない！？」

「ヌルヌルしてて気持ち悪い…それになんなの、この下から噴出してる生暖かい空気…」
「えっ！？ちょっ、ちょっと！そんなもの近づけないで！」

「んっ！んあああぁぁあん！！！」
「いやぁっ、触手が私の膣内に入ってきた！？あんっ、中でウネウネ動かないで！」
「早く抜いて…やぁんっ！？ダメっ、出したり入れたりしないで！はぁんっ！」

「なんで！？なんで、出し入れのスピードが速くなってるの！？早く抜いてよ！」
「ダメっ！そんなに激しくされたら私！イックウウウウウウッッ！！」

「はあっ…はあっ…触手なんかにイカされた…それに何この白い液体？」
「男の人の精液とは違う、まるで高速修復材みたい…こんなのが触手から出るなんて」
あ…
「えっ、地面が揺れだした！？地震…じゃない！なにこの気持ち悪い揺れ！？」
「足元の触手たちが動き出した…何が始まるの！？」
ドビュッ！
ドビュッ！
ドビュッ！

「！！？、いやああっ！なにこれ！？」
「やめて！私を食べないで、私なんて食べても美味しくないってばぁ！」
「えっ！？自分の子供をそんなに拒絶するなですって！？あなた、何を言ってるの！？」

ギュルルルルッ

ぐるれぇ～

「この触手たちも今私を食べようとしてるコレも私が作った！？私はこんなの作った覚えはない！」
「えっ、記憶を消されたから覚えてない！？
嘘…じゃあ本当に私がこんな気持ち悪いものを作ったの…」

「んっんんんんんんんっ！！？」
（私の体が丸ごと飲み込まれた！？中もヌルヌルしてて気持ち悪い！）

ごくっ

ドクン…

ドクン…

（息もできないし苦しい、このままだと私、本当にコレに食べられちゃう…）
（私はもうダメ…みたい…提督、戻れなくてごめんね…）

（……なに、この光…それにこの感覚…まるで私の存在が作りかえられてるみたい
……ダメ…もう意識が…）

（

ピカー

「……んっ、あれ？ここは……そうか、そうだった…」
「すべて思い出しました、私はご主人様の命令でこの子達を作ったんでしたね」
「そして一旦記憶を消して、私が完全にご主人様のモノになれるようにこの子達を使って体の隅々まで改装してもらう…」

ふぁさ…

「ご主人様を楽しませるために私が自分で提案したことでしたね♪」
ふふっ、すっかり忘れてました♪」
「ほら、いつまでもママを咥えてないで離しなさい♪」
ご主人様に改装した私の姿をちゃんと見せないと♥」

じゅるるっ…

「ととっ、やっぱり改修直後は少しふらつきますね…あれ、支えてくれるのっ？ふふっありがと♥」
「見えてますかご主人様、新しい私♥ご主人様に興奮してもらえるような姿になったと思いますが」
「ふふっありがとうございます♥それと改修を手伝ってもらったこの子達になにかご褒美をあげたいんですが…」
ぺろっ
「それはいい考えですね♪みんな喜んで、ご主人様がご褒美に私の体を好きに使っていいって言ってくれたよ♪」

「あんっ♥いきなりおマンコに入ってきたぁ♥ああ、気持ちいい♥
ほら、他の子も遠慮しないで私の体を弄んで♥」

「あれ？あなたはお口がいいの？ふふっ♪それじゃあ、あーん」
「ちゅっ！れろれろ、れろっ！じゅるっ…じゅぶりゅるるっ、じゅぶるっ！じゅっぶ…じゅぶりゅ…！」
「ふふっ、みんな激しい♥そんなに激しくされたら
私すぐイッちゃう♪んっ、んんんっうぅぅぅぅっっっ♥♥♥」

ジュボ
ジュボ
ズズズ
ズズズ
ズズズ

「んんっ、ゴクッ…ゴクッ…ぷはあっ、はあっ♥はあっ♥みんなのお汁美味しい♥」
「この子達がいればご主人様の艦娘を増やすのに役にたちそうですね♪」
「私にもこれからは言ってもらえれば、ご主人様のために何でも作りますからね♥
強力な兵器でも、調教のための道具でも♥」

ぬちゃあぁ♥

ドビュッ!

ドビュッ!

ドビュッ!

「あっこらっ!喧嘩しないの、ちゃんと全員相手をしてあげるから♥
それが終わったら次はご主人様と二人っきりで…ふふっ♪」

「はあっ、最後はあなたですか、提督」
「何がって…資材採取のために毎日当番が二〇人の精液を搾り出す事、まさか知らないんですか？」
「はあっ…さすがは担当艦娘をすべて取られた方…まさに無知無能という言葉がお似合いね」
「さあ、提督と無駄なオシャベリをしてるのももったいないし…さっさと準備しなさい」

「どうしたのですか早く勃起させなさい？
不本意ですがこれもご主人様の命令…私の胸で精液を絞り取ってあげます」
「ほら挟みましたよ…なぜ小さいままなんのですか？
これは勃起もできないほどの粗チンなのかしら？」
「？今ビクッておチンポが反応したわ…もしかして提督、罵倒されて興奮してるのかしら？」

「はあっ…こんなドMが私たちの提督だったなんて…
いいわ、そんなにいいなら好きなだけ罵倒してあげます」
「なさけない粗チン提督、ほら私の胸に完全に埋もれて見えないわ…
あなたの前にヌイてあげた整備員は頭くらいは出てましたよ」

「やっと勃起しましたか…では搾精を始めます」
「はあっ、射精するときにはちゃんと教えなさい
専用の容器に入れて回収しなければ射精させても無駄になっ
「んっ、んっ、提督のおチンポは小さくてやりづらいですね…
我慢汁と私の汗で滑って…ほらまた胸から出て行ってしまい

「ハアハアと息遣いが荒いですね…気持ち悪いので
その醜い顔をこちらに向けないでもらえないかしら」
「なに体をビクつかせてるのですか？やめてください
なるべく提督に触りたくないのに時々あたってしまいます」

すりすり

くちゅ

「あっコレは……コレはどうゆうことですか提督？」
「射精するなら教えなさいといったはずです…コレでは資材にもならないタダのゴミです」
「しかもそのゴミを私の胸に掛けるとは…頭にきました…」
ビクッ
とぴゅ♡

「もう資材回収なんて関係ない、そんなに射精したいなら出し尽くすまで射精させてあげるわ」
「射精しすぎて廃人になってしまうかも知れないけれど…まあいいでしょう」

「提督で何人目のだったかしら？あまり廃棄が出過ぎるとご主人様に怒られるわね」
「安心して、提督の代わりの100人目はまた別に探して連れてくるわ」

ゴゴゴ

「ふうっ…なにをジロジロ見てるのですか？別に始めて見わけではないでしょう？」
「…ああ思い出してしまいましたか？
あなたの鎮守府を壊滅させて、あなたの艦娘をすべてご主人様に差し出した私の姿を…」

むにむに

「そんな私に興奮するなんて、提督は底なしのド変態ですね…さあ始めましょう」
「提督からすべてを奪った女の懲罰搾精を…」

「んっん、激しい？当たり前です、これは奉仕ではなく、執行なのですから」
「優しくする理由などないわ」
提督はただ何も抵抗できずひたすら無慈悲に絞り取られてなさい」

「こんな状況でも興奮してるのね、気持ち悪さを通り越して吐き気がしてきたわ」
「もっと激しくしてさっさと終わらせましょう…」

すりすり

「んっ、あっ、はあはあっ…我慢しても無駄です
提督がどんなに我慢しても私はあなたが出し尽くすまでパイズリをやめないわ」
「提督のおチンポが私の胸の中で無残に飛び跳ねてる
顔も歪んできて最高に惨めな顔をしてるわ」

「その顔だけは気分が高揚します、他の廃棄になった者もそんな顔をしてたわ」
「さあ、射精しなさい！なんの役にもたたなかったゴミ精液を限界まで出し尽くしなさい！」

「んっ！んんっ！！はあはあっ、なかなか出たわね…でもまだ足りない」
「休んでる暇なんてないわ、言ったでしょう？
私はあなたが出し尽くすまでパイズリをやめないと…」

「あっ、んんっ、やっぱり射精してすぐは辛いらしいわね…
おチンポだけじゃなく体全部がすごく痙攣してるわ」
「辛いなら早く次の射精をしなさい、出し尽くさないとこの苦しみと快楽は永遠に続くわ」

「…また出たわ、連続で射精するとなかなかの量になるわね…」
「私の胸に全部おチンポが埋まってるくせに、精液だけはあふれ出してきたわ…」
「とても臭い…なにを食べたらこんなに臭い精液を出せるのかしら？」

「さあ、とっとと終わらせましょう、早くお風呂に入りたいので」
「こんな臭い臭いをつけたまま赤城さんの元へは行けませんから…」
今夜は赤城さんとご主人様に可愛がってもらう約束ですので」

「Nice to meet you～Saratogaです♥こちらは初めてですか？」
「No problem♪心配しなくても大丈夫ですよ♥サラがやさしくシテあげますから♥」
ニコッ♪
「それより、ここに入る時のqualifications(条件)お忘れではないですよね？」
「それはよかったです♪では始めていきましょうか♥」

「Wow！もうこんなにErection(勃起)させてますね♪とてもbig penisです♥」
「サラの元提督とは大違いですね♥提督はとてもPoor little penis(貧相なちんぽ)でしたから♪」
「Oh sorry！提督とお客様とでは比べるのも失礼でしたね♥」
「ではまず、このbig dickをサラのお手手でシゴいてきしあげますね♥」
キュッ
ギーギー

「んっ、Very hot♪サラのお手手、ヤケドしてしまいそうです♥」
「シ～コシ～コ♪お客様、このくらいの強さで大丈夫ですか？」
「もうちょっと強くですか？うふふ、OK♪
うんしょ、うんしょ！このくらいでいいですか？」
「WOW！おチンポがビクビクしてきましたよ♪
どうぞサラのお手手でイッてください♥」

しゅっ
しゅっ

「Oh my god♪たくさん射精しましたね♥
サラのお手手がお客様のザーメンでヌルヌルになってしまいました♥」
「すぅ～Good smell♥生臭くてとても男らしい臭いです♥」
サラ、この臭い大好きです♥」

oh♡

ドピュッ
ビュビュッ

「はあっ♥はあっ♥サラもEstrus(発情)してきました♥
お客様、このザーメン飲んでもいいでしょうか？」
「Thank you♪では遠慮なく、いただきます♥」

「ん～っちゅ、ちゅぱ…ちゅっ、ちゅっ！れろ、れろれろ、じゅるるるっ♥」
「ネバネバしてて喉に絡み付いて、とてもエッチな味です♥」
「あ、お客様のおチンポにまだザーメンが残ってますね♪
お掃除もかねてキレイに舐めさせていただきます♥」

ぺろぉ♥

ぢゅるる、

ぢゅぱぁ

「じゅっぽじゅっぽ…じゅず、じゅるるる…じゅずずずっ
♥じゅぞっ…♥じゅっぽじゅっぽ、じゅぶりゅりゅるるるっ♥」
「じゅるるるるっ！ぷはぁっ！うふふ、ご馳走様でした♥
とても美味しかったですお客様♥」

「とても美味しいザーメンをご馳走してくれたお客様には特別にサラの本当true colors(本当の姿)を見せてあげます♥」

「本当は常連様にしかお見せしないのですがサラはお客様が気に入ってしまったので特別ですよ♥」

「サラのエッチな姿を存分に楽しんでくださいね♥」

コピー

「うふふ♥どうですかサラのtrue colors?(本当の姿)」
「露出度もあがってNipple(乳首)なんか隠しきれてませんし
何より気づきませんか?」
ニっ
「そうです♪サラのメスの匂い♥この匂いをかいだお客様は
一晩中Erection(勃起)が収まらなくなってしまうんですよ♥」
「うふふ、安心してください♪
そのためにこの場所があるんです♥サラが優しく一晩中ヌキヌキしてあげますね♥」

「Wow！さっきよりもビンビンになってますね♥早く触って欲しいですか？」
「はい♪それではagain、サラのお手手でしていきましょう♥」
「シ～コシコ♪シ～コシコ♪先ほどと変わらない速度なのにおチンポの反応が全然違いますね♥サラのお手手で暴れまわってます♥」
「いいんですよ♪お好きなように射精しても♥サラがちゃんと受け止めてあげます♥」
「ロコ！そうですね♪さっきと同じ速度で射精じゃ、つまらないですよね♥」
しゅっ
しゅっ

「では速度を上げちゃいますね♪シコシコシコォ～♪
うふふ、お客様の我慢汁でサラのグローブがヌルヌルになって
すごい音が鳴ってますね♥」

「あ、カリの所を刺激するとビクビクッてしますね♥
ここがお好きなんですね、ではもっとしてあげます♪」
「ほら、クリュンクリュン♪うふふ、お客様♪お体が震えて面白いです♪」
「我慢なさってるんですか？
まだまだ夜は長いんですから、我慢せずに欲望のままに射精してください♥」

「あっ♥んん〜〜〜♥♥♥すごい出しましたね♥
お客様Wow that's cool(かっこいい)♥」
「どうしますか、少しお休みになりますか？
…うふふ♪まだまだお元気ですね♥では次はオッパイでしましょうか♥」

「焦らなくて大丈夫です♥お客様が提示された情報と物資に見合う時間は
サラの事を好きにしてくださって構いません♥」
「これからもSpyがんばって下さいね♪サラとサラのご主人様のために♥」

萩風「本日もお疲れさまですご主人様♥
今日は私と嵐がご主人様にご奉仕いたしますね♥」
嵐「おお！じっくり見るのは初めてだけど、やっぱりデッカイな！
それで萩、今日はどうやって奉仕するんだ？」
萩風「う～ん、そうね…じゃあまず嵐はおチンポを握ってみて♪」
レイイイン
嵐「ん、こうか？…って熱っ！
チンポってこんなに熱いもんだったんだな！
それに鉄みたいに硬い!?」
萩風「そっか、嵐は手で触ったことはなかったわね♪
それじゃあ握った手を上下に動かしてみて♥」

嵐「上下に…んっ、んっ、こんな感じか？これでご主人様は気持ちよくなるのか？」
萩風「ええ、これは、手コキっていうご奉仕よ♥ほら、おチンポもピクピクしてご主人様も喜んでいるわ♥」
シコ
シコ
シコ
シコ
嵐「本当だ♥ご主人様が気持ちよくなってくれて、俺も嬉しいぜ♥」
萩風「上手よ嵐♪じゃあ私はこちらをご奉仕しますねご主人様♥」

萩風「カリカリッ♪カ～リカリッ♪どうですかご主人様♪
嵐に手コキされながら私に亀頭をイジられるの♪気持ちいいですか？」
萩風「うふふっ、よかったです♥
前にご主人様が教えてくれた亀頭攻め、ちゃんと練習してきました♥」
嵐「うおっ!?すげぇチンポがビクビクしてきたぞ！
萩の、ソレ、相当気持ちいいみたいだな♪」
くりくり
萩風「うふふっ♪嵐の手コキとの合わせ技だからよ♪」
嵐「そっか！じゃあ俺も負けずに手コキをしないとな♥んっ、んっ、んっ♪」
萩風「あっ、嵐！いきなり激しく動かしちゃ…」
シュコシュコ
シュコシュコ

嵐「えっ？おっ、おおおっ!?精液が出てきた！」
萩風「もう、嵐ったら！
男の人のおチンポは敏感なんだから、いきなり激しくしちゃダメよ！」
ビュルッ
ドクッ
ドクン
嵐「うっ…ご、ごめん…でもほら！
ご主人様も気持ちよかったみたいだし♪」
萩風「もう、ご主人様の一番搾りはもっと大切に味わいたかったのに…」

萩風「ん～♥でもいい匂い♥イカ臭くてとっても男らしい匂いです♥」
嵐「確かにこれはクセになる匂いだな♥なんだか体が熱くなってきたぜ♥」
萩風「うふふっ♪それは嵐の体がご主人様に甘えたがってる証拠よ♥」
嵐「ああ、ダメだ♥この匂いを嗅いでると…」
トロォ…♪
トロォ…♪
ドロッ
キュン
キュン

嵐「あ～む、ちゅ…ちゅぢゅるるるっ！
ぢゅっちゅ、ぢゅっちゅ、ぢゅ～～～～っぱ♥」
萩風「あらあら、嵐ったら♥我慢できずにフェラしちゃったのね♥」
嵐「じゅっぽじゅっぽっ、ちゅ、ちゅぶっ！
じゅっぽじゅっぽ！こふぇはフェラっていふのか？」
嵐「じゅっぽじゅっぽ…じゅず、じゅるるる…
じゅずずずずっ！ぺろん、ぺろん♥」
ぺろっ…
ぺろぺろ…
ちゅう
萩風「ああ、あんなに美味しそうにおしゃぶりして♥
ねえ嵐、私にもフェラさせてよ～」
嵐「じゅっぽ、じゅっぽ…じゅぽぽっ！じゅぽっ！
ちゅぽんっ！しょうがないな、萩もやっていいぞ♪」

萩風「ふわぁ♥ありがと嵐♥ではご主人様、失礼しますね♥」
萩風「じゅっぽ、じゅぽじゅぽ、ちゅ…ちゅっぽおお～～！
んんんーっ！おいひいですご主人様♥」
レロレロ
じゅぶるちゅちゅ
嵐「うわぁ、萩があんなに夢中になってるの初めて見たかも！」
萩風「じゅっぽ！じゅぽっ！じゅぽっ！ぬっぷ、ぬっぶっ…
じゅっぽおお～ちゅっぽちゅっぽ、じゅる、じゅぞぞ～～♥」
嵐「な、なあ萩い、もういいだろ？俺にもしゃぶらせろよお～」
萩風「うふふっ♥じゃあ嵐も一緒におしゃぶりしましょ♪」

二人「レロッ！レロロ、れろぉん…！れろれろ、れろろっ！じゅるっ…
じゅぶりゅるるっ、じゅぶるっ！じゅぷりゅりゅ…じゅっぷ、じゅっぷ♥」
嵐「じゅばっ！じゅばっ！じゅばばっ…じゅっぽ、じゅっぽぉ♥
なんでこんな美味いんだ♥
こんな美味いチンポ、ずっとしゃぶってたい位だぞ♥」
レロレロ
じゅぶるちゅちゅ
ぺろ…
ぺぇ…
ちゅう
萩風「じゅっぽ…じゅるるるっ！じゅばば！じゅぼっ！じゅぷりゅりゅ～♥
ええ、私もご主人様のおチンポをずっとしゃぶっていたいわ♥」
二人「じゅるっ…じゅるるる…じゅるる…
んふ…ぺろ、ぺろぺろ…れろ、ちゅぢゅ…ぢゅっぱ！　ぢゅばばっ♥」
嵐「んっ？ご主人様、もうイキそうなのか？チンポがビクビクしてきたぞ♪」
萩風「どうぞ、ご主人様の精液を私たちのお顔にかけてください♥」

二人「んっ、あああああぁぁぁんっっっ♥♥♥」
嵐「はあはあ、二回目なのにすげぇ量♥
俺たちの顔が真っ白になっちまったぜ♥」
萩風「ああ、まるでご主人様に包まれているみたいで幸せです♥」

萩風「お顔から垂れてしまった精液は…
あ～ん♥ぺろっ、れろっ、くちゅっ、くちゅっ♥」
嵐「おお、精液を飲んでる!? 萩、精液って美味しいのか?」
萩風「うふふっ♪嵐も飲んでみたら?」

嵐「じゃ、じゃあ…あ～む、れろれろ、ぐちゅっ、ぐちゅ♥んっ！美味い！」
萩風「ちゃんと舌の上で転がして、口の中全部で味わってそれから飲むのよ♥」
二人「ぐちゅっ、ぐちゅっ、んっ、んっ、んちゅっ♥…ごっくん♥」
嵐「はあはあっ、こんな美味いモノがあったなんて知らなかったぜ♥」
ドピュッ♥
萩風「ご主人様♥美味しい精液をごちそうさまです♥次はどのようにご奉仕をいたしましょうか？」
嵐「俺たちはご主人様の望むことならなんでもするぜ♥なんせ、俺たちはご主人様のメス奴隷なんだからさ♥」

「上を失礼しますねご主人様、あの…涼月は重くはないですか？」
「うふっ♥そう言ってもらえると嬉しいです♥」
「あ、ご主人様のおチンポ、先ほど射精したばかりなのにもうビンビンですね♥さすがです♥」
「自分で動くのは初めてで上手くはないかもしれないですがご主人様に気持ちよくなってもらえるように頑張りますね♥」
くちゅ
あ…♡

「んっ、ああんっ♥やはり太いですねご主人様のおチンポは♥」
「中の中まで挿入ってきて、涼月の存在全てを支配されたような感覚になれます♥」

んっ♡

ガッ〜ぷんッ

「もちろん涼月のすべてはもうご主人様のモノなのですが♥」
「では、そろそろ動いていきますね♥ご主人様、よろしくお願い致します♥」

「あっ、あっ、ああんっ！おチンポのカリの部分が私の膣を引っ掻いて、気持ちいいです♥」
「どうですかご主人様？涼月はちゃんとご主人様を気持ちよくできていますでしょうか？」
「うふふっ、ありがとうございます♥ご要望がありましたら遠慮なく言いつけてください♥」

『はい♥今度は激しく動くのですね♪ご主人様が望まれるなら、頑張って腰をお振りします♥』

「んっ、んっ、あっ、はぁあんっ♥♥これ、気持ちよすぎます♥♥♥」
「ああんっ、んっ、んあんっ♥ダメ！涼月がご主人様を気持ちよくしなきゃいけないのに！
あっ、ああんっ♥」

「腰、止まりません！あぁんっ♥ご主人様ぁ♥申し訳ありません♥」
「涼月、もうイッてしまいそうです！ご主人様も一緒にイッてください♥♥♥」

パン！
パン！
パン！
ズッチュ
ズッチュ

「あっあああああぁぁぁんっっっ♥♥♥」
「はあっ♥はあっ♥ああんっ♥ビュクビュクッて精液が出てるのがわかります♥」
「私のおマンコもヒクヒク痙攣してご主人様のおチンポに甘えちゃってます♥」

ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
びゅるるう♡

「ご主人様も気持ちよかったみたいですね♥こんなに射精して涼月も嬉しいです♥」
「お腹の中がご主人様の精液でタプンタプンになってます♥」
「お疲れ様ですご主人様♥今、おマンコからおチンポを抜いて綺麗にいたしますね♥」

はぁ〜

はぁ〜

「えっ？あっ、どうしたのですかご主人様？手を離してもらえないと抜けませ…」

とろぉ…

「あっ、あぁんっ！どうなされたのですかご主人様！？
「やはり、涼月のご奉仕では物足りなかったのですか？」
「自分から腰を振る涼月がエッチだったから可愛がりたくなったのですか？」
「えっ？あ、ありがとうございます♥褒めてもらえて涼月は幸せです♥♥」
「涼月の全てはご主人様のモノなのですからお好きになさってください♥♥」

パンパン
パンパン

「あんっ！あんっ！はあんっ♥激しいですご主人様ぁ♥」
「待って！待ってください！！そんなに激しく腰を振ったら私スグにイッちゃいます！ああんっ♥」
「やあんっ、奥ばかり突くのダメですぅ！私イッたばかりだから奥が敏感なんです♥」
「あっ、あっ、んっ、んぅぅっ～♥らめぇ～らめれすっ！私もう我慢できません！！」

「あ゛っ、あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あああああああああああんっ♥♥♥」
「お願いですご主人様ぁ！腰を止めてください！私、今イッて…あ゛ああんっ！！！」
「頭真っ白で何も考えられません！バカになってしまいます♥」
「ダメッ、息ができない！死ぬ！死んじゃいます！はあんっ！」
ぐちゅ♡
ぐちゅ♡
ぐちゅ♡

「あ゛あ゛あ゛あ゛あああああああああああんっ♥♥♥あ゛、あ゛あ…」
「はあっ♥はあっ♥はあっ♥すごすぎですご主人様ぁ♥涼月、本当に死んじゃうかと思いました♥」
「こんなに射精したのにまだまだ硬いまま♥これは涼月一人ではお相手するのが大変ですね♥」
「そうだ！姉さんやお冬さんにも手伝ってもらいましょう！
きっとみんなここでの生活を気に入ってくれるはずですよ♥」
ビュビュ
ドビュルッ！
ビュッ
ブッビュルビュビュ
ドビュ！

「あんっ♥うふふっ、乱暴な人♪何も押し倒さなくてもサラは逃げたりしませんよ♥」
「あんなに射精されたのにまだまだお元気ですね♥great（凄いです）」
「いいですよ♥condom（コンドーム）なんてunnecessary（必要ないです）♪」
「お客様がcondom（コンドーム）をつけたいのならば別ですけど、うふふ♪」
ガシッ
どさっ

「あっあんっ♥もうお客様のおチンポ大きすぎですよ♪」
「サラのおマンコ、Happyな気持ちになって勝手にヒクヒク動いちゃいます♥」
ずっぷぅぅ♡
「どうですかサラの膣内は？肉厚で優しく包み込む感じがしませんか？結構評判いいんですよ♪」
「お客様のお好きなタイミングでお好きなように動いて気持ちよくなってくださいね♥」

「あっ、あぁんっ♥Masculine piston♥（男らしいピストン）サラも気持ちいいです♥」
「んっ、んっ、あっ、はあんっ♥お客様のおチンポがサラのwomb（子宮）をコンコン突いています♥」
「そんなに愛されたら、サラはお客様に恋してしまいます♥」

ズポッ
ズポッ
ズポッ
ズポッ
ズポッ

あっ♡
あっ♡

「嘘だと思います？うふふっ♪どうでしょうね♥あぁんっ♥」
「それよりお客様？そろそろ射精したいですよね？いいですよ♥
サラのおマンコにたっぷり注ぎ込んでください♥」

「あっ、あっ、はああぁあぁぁぁぁぁぁぁぁんっっ♥♥♥」
「はあっ、はあっ、My body is hot♥（体が熱いです）サラもイッちゃいました♥」
「いっぱい射精したのにまだこんなに出せるなんて、お客様はまるでstud（種馬）ですね♥」
「おチンポは落ち着きましたか？
サラの中でおチンポが小さくなってるのがわかります♥very cute（とても可愛いです）」

びゅるびゅるっ
ぴくん
はあ♡
はあ♡
はあ♡

「あら？もうお時間みたいですね♪名残惜しいですが今日はこれでお終いですね♥」
「えっ、まだしたいですか？ﾆﾔﾆﾔ…では、こうしましょう♪」
ニコ♥
「これから先、お客様がサラの〈奴隷〉になってくれるなら
あと一回だけ延長してもいいですよ♥」
「どうします？次回まで我慢できるのでしたらこの提案は断ってもらっても構いませんよ♥」

「It's a deal（交渉成立）ですね♥これからはサラ以外は指名しては駄目ですよ♥」
「うふふっ、実はサラも、サラ専用のオモチャが欲しかったところなんです♥」
「前の方はサラの匂いを嗅ぎすぎてしまいましたが、お客様は大丈夫ですよね♪」
「さあ、サラの奴隷になったご褒美です♥存分サラのおマンコを堪能してください♥」

「あぁんっ♥さすがに一晩中サラの匂いを嗅いでただけあって小さくなってもすぐにErection(勃起)してしまいますね♥」
「OK♪サラのおマンコを好きに突いてください♪多分、お客様がサラを好きに犯せるthe last day(最後の日)になるでしょうから♥」
「お客様の人生はもうサラに貢ぐことと
サラのオモチャになることにだけの一生になるんですから♥」
「さあ、キてください♥サラのCute slave♥(可愛い奴隷ちゃん)」

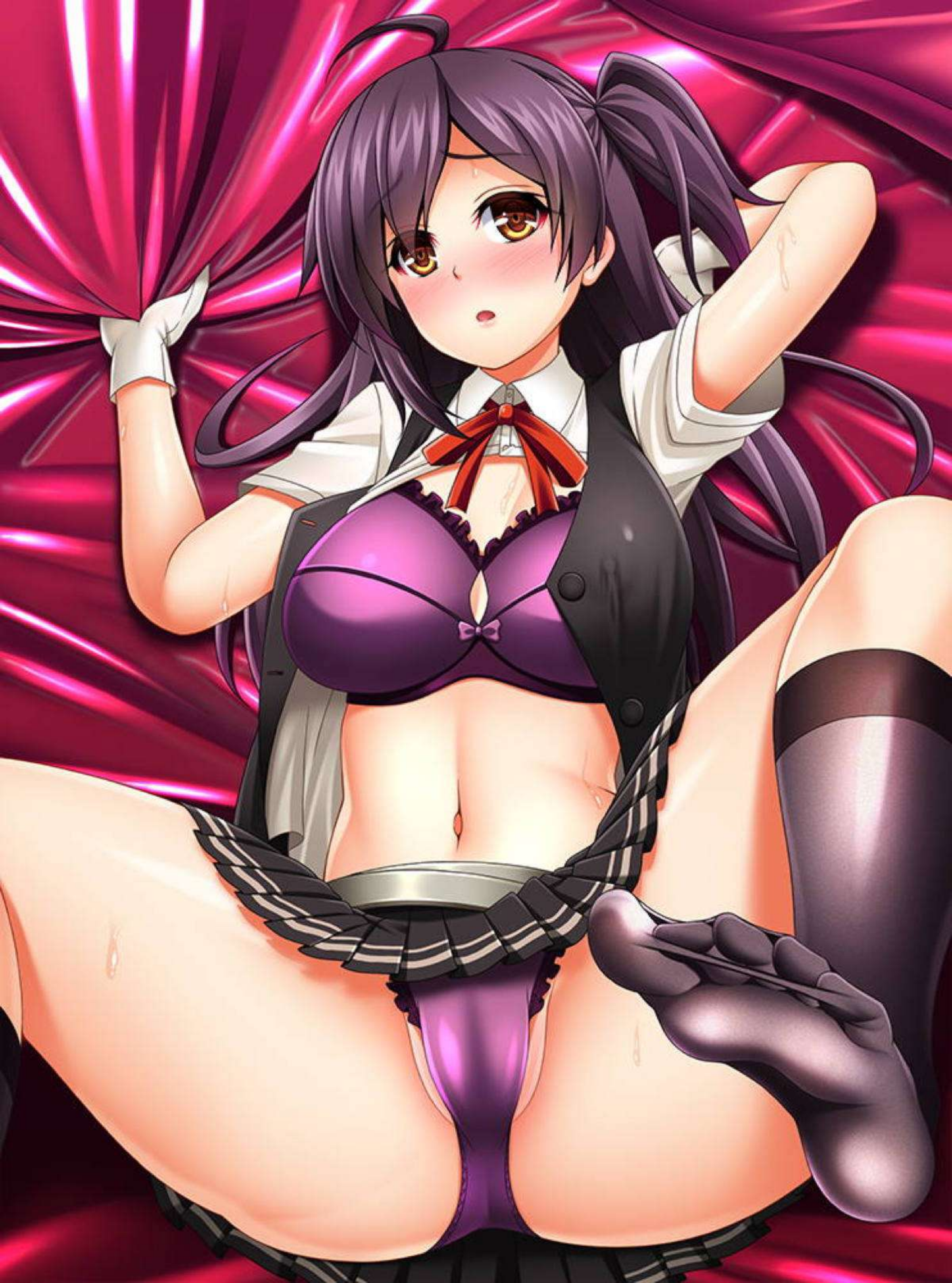
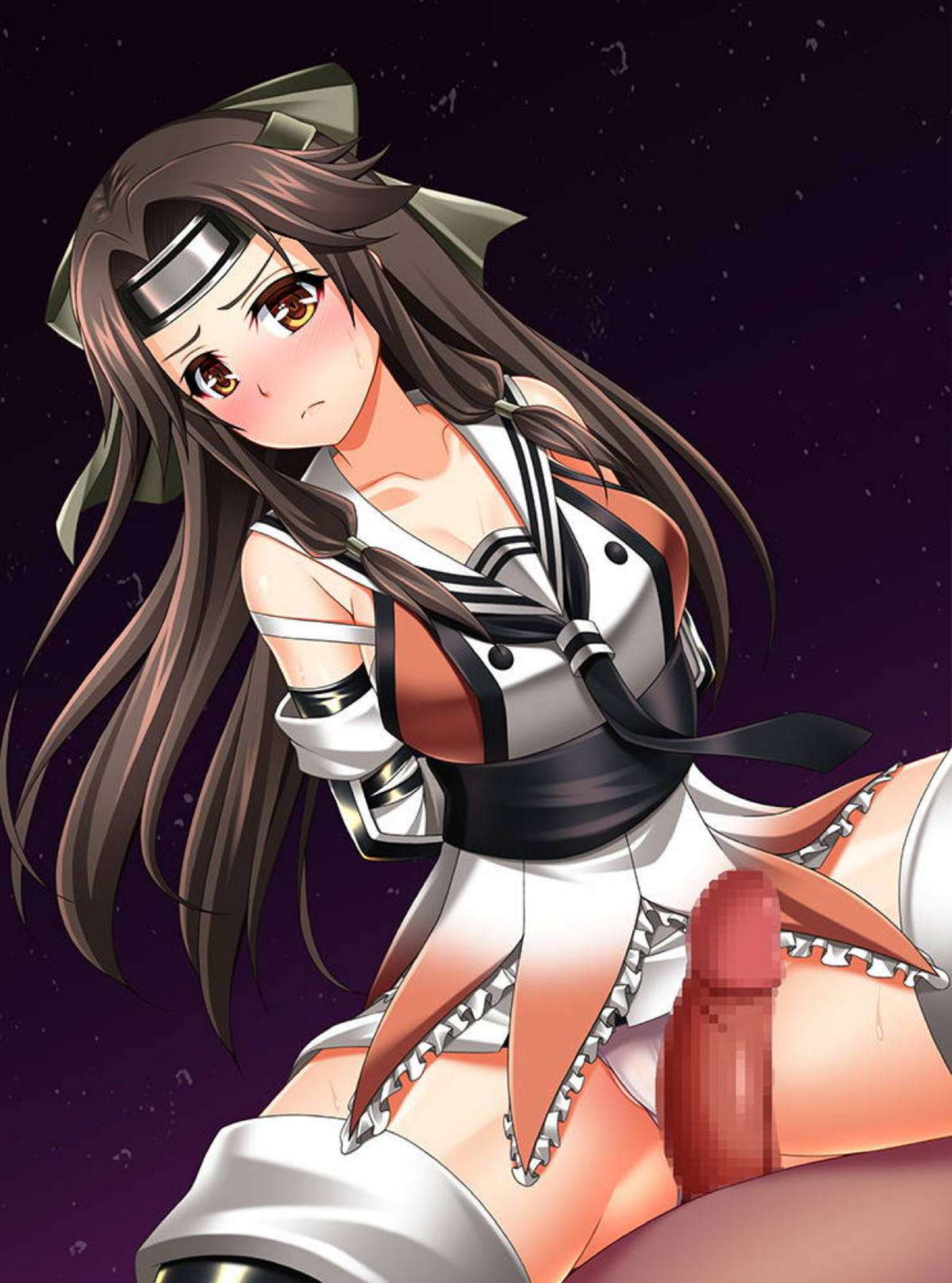
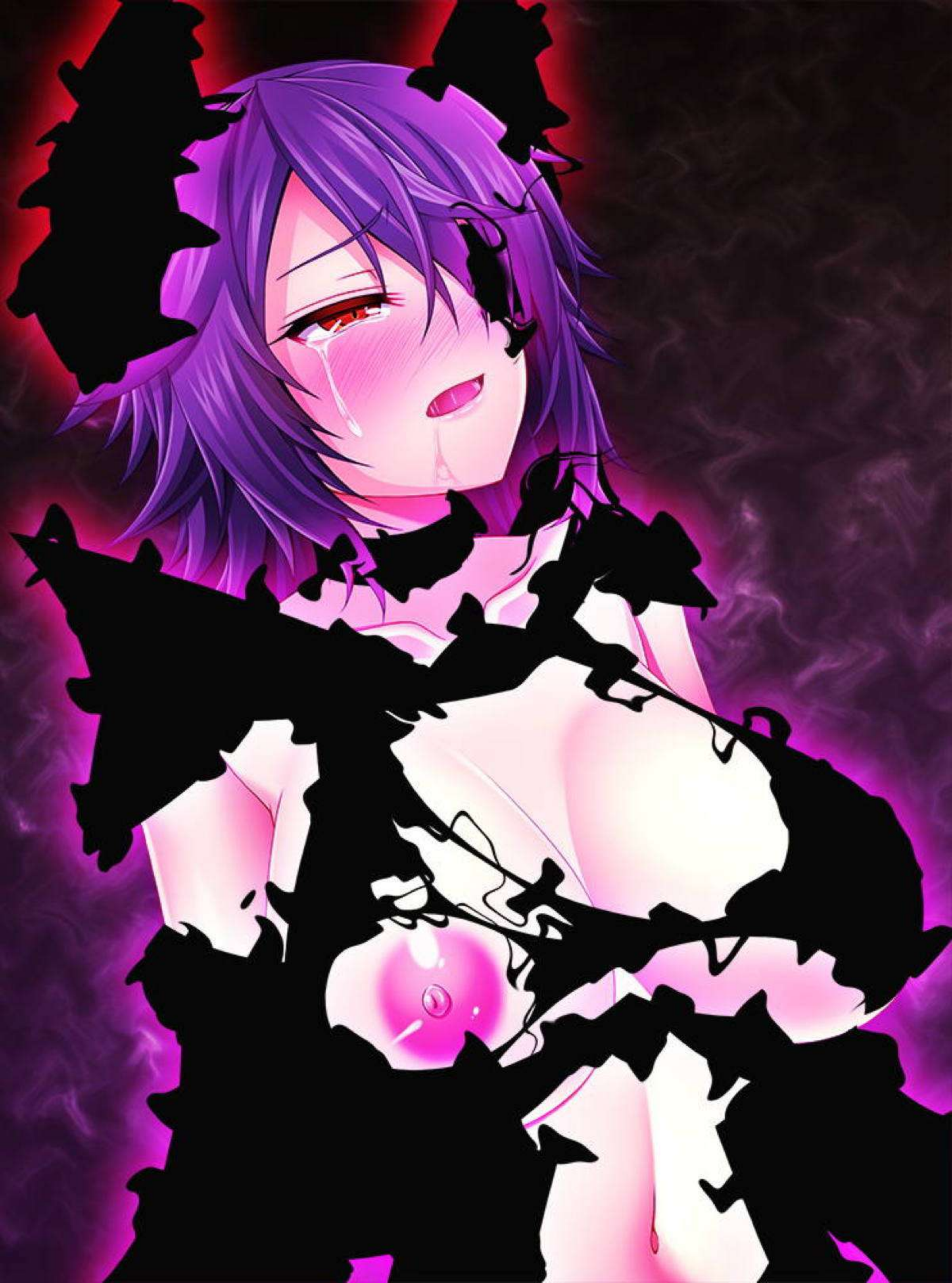
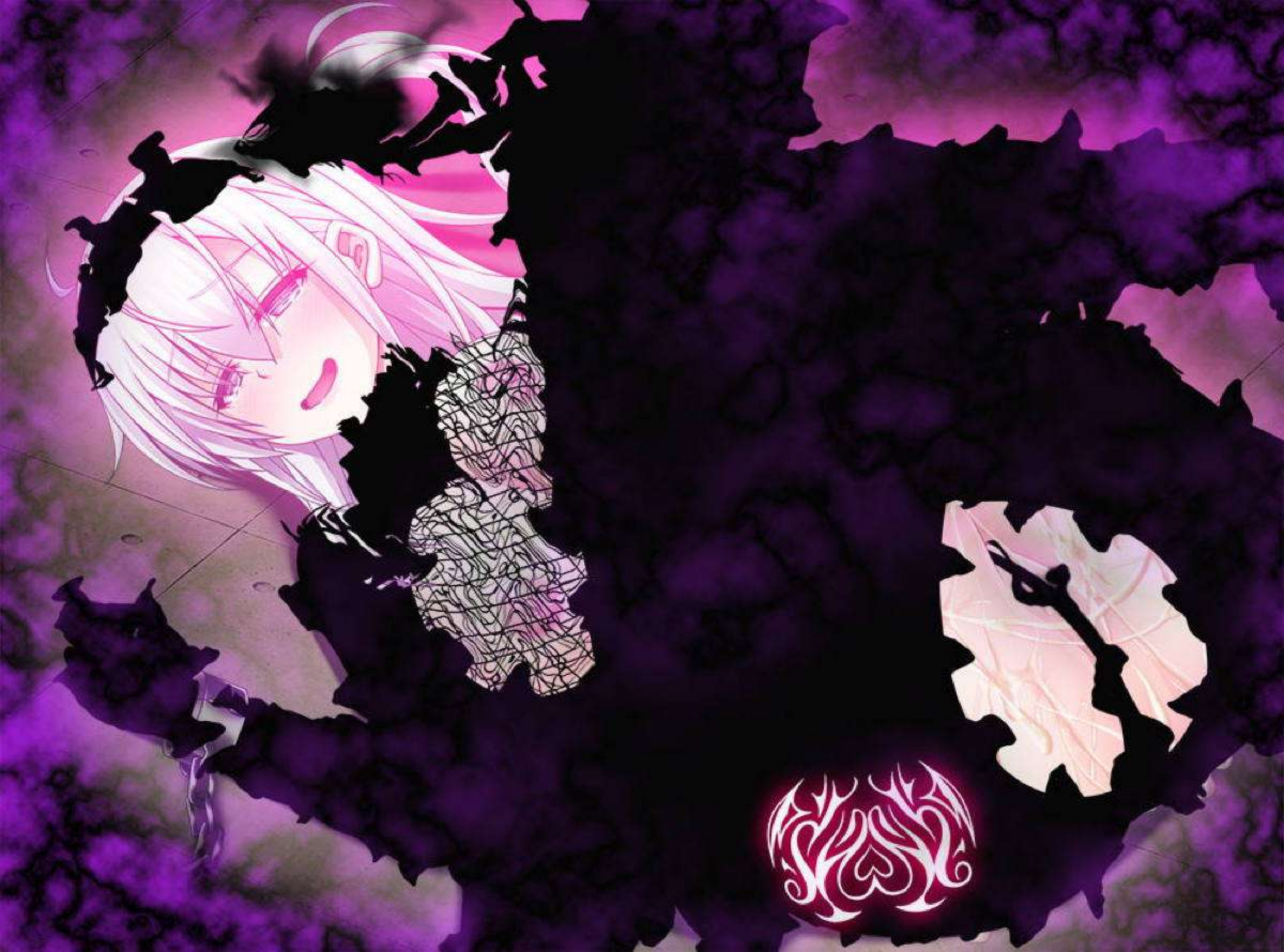
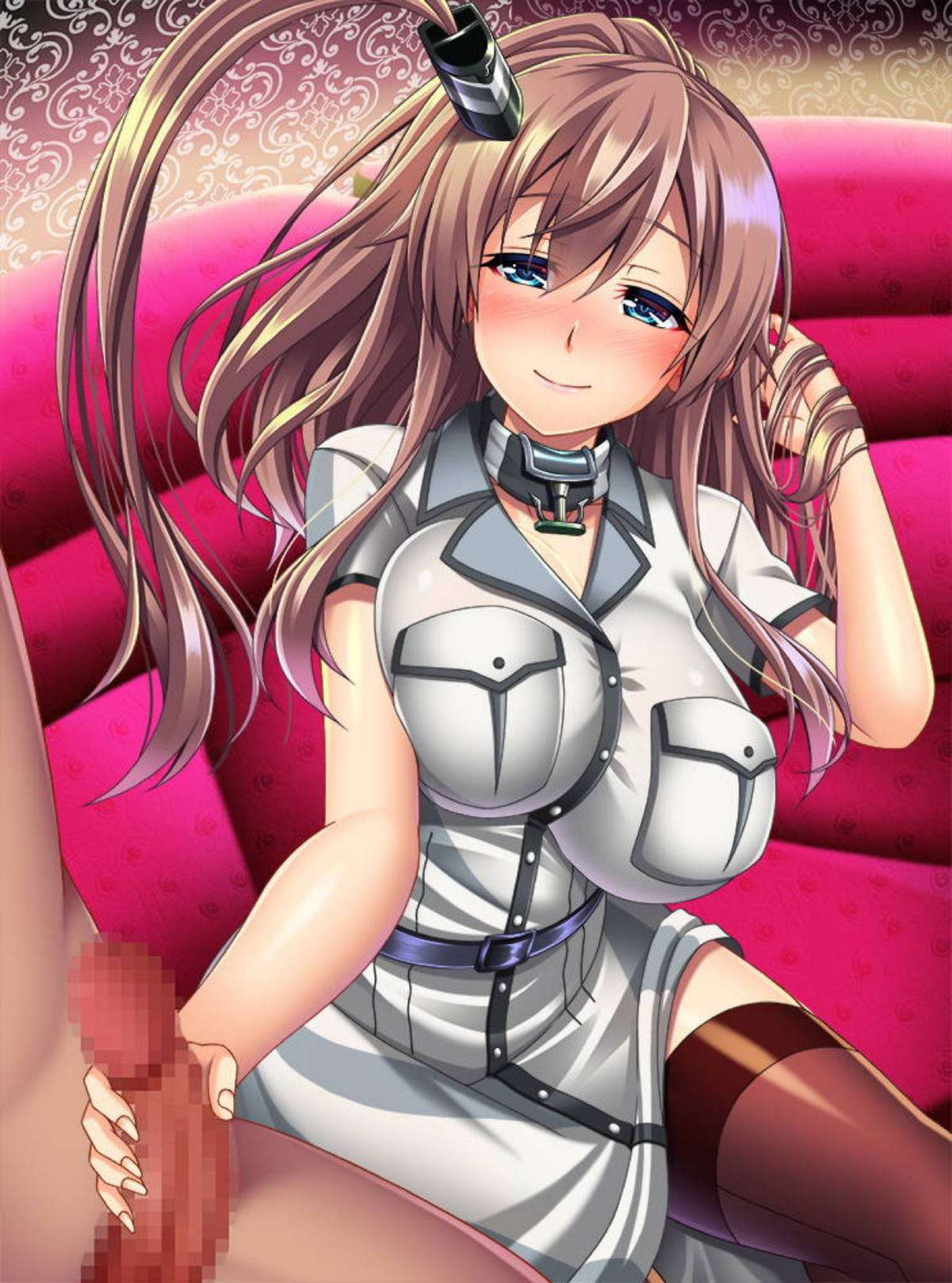
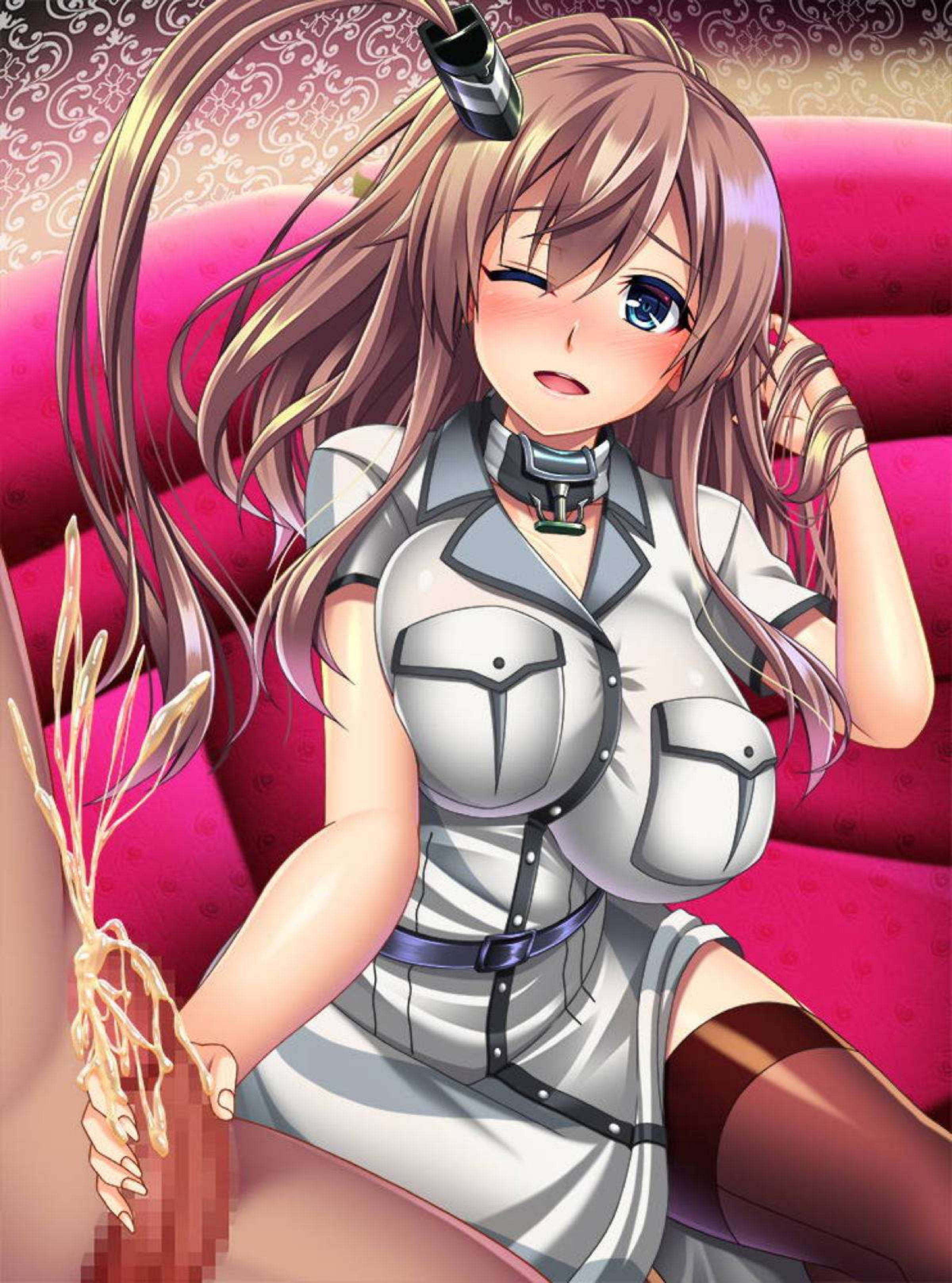
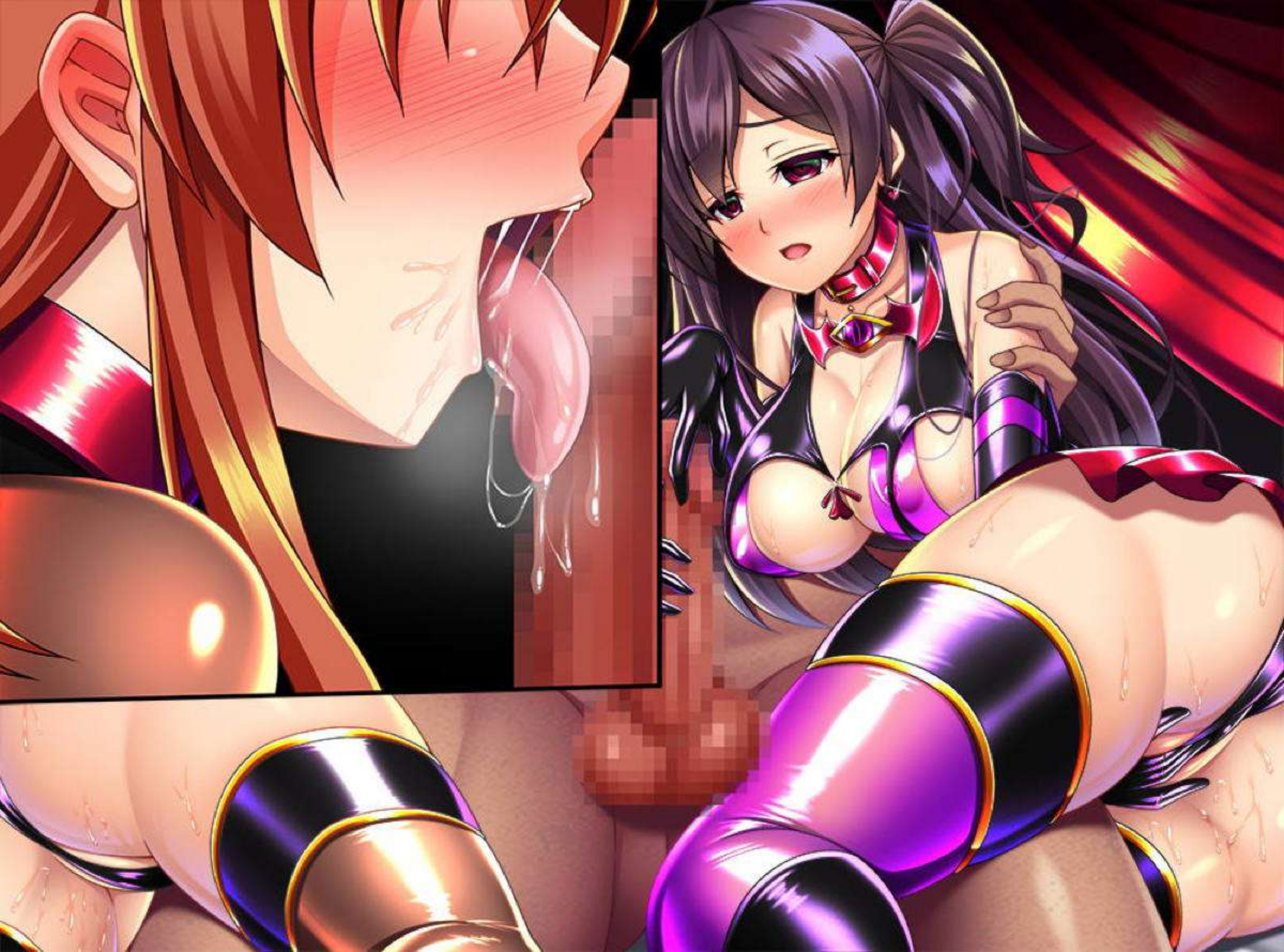
「あんっ♥あっ、あんっ♥あっ、やぁんっ♥激しいですね♪いいのですか？
そんなに激しくするとすぐにイッてしまいますよ♥」
「せっかくの最後の一時、よ～く味わわないと後悔しちゃいますよ♥あっ、あんっ♥」
「あっ、そこぉっ♥cervix（子宮の入り口）♥そこがサラの気持ちいいpointなんですよ♥」

ジュポッ
ジュポッ
ズポッ
ズポッ
ズポ

あんっ♡
はっ♡
おっ♡

「次回までにちゃんと覚えておいてくださいね♥
お客様のMaster（ご主人様）が好きなpointなんですから♥」
「Wow！おチンポがビクビクしてきました♥
もう終わっちゃいますよ？いいんですか？うふふっ、はいど～ぞ♪」

「んっ、んんんっ♥はあっ、はあっ…うふっ♪射精してしまいましたね♥」
「どうでしたか？サラのおマンコは堪能できましたか？
これでお客様は生涯サラの1ave（奴隷）ですね♥」
「さあ、満足なさったらその粗末なおチンポを早く抜いてください♪」
…えっ？さっきと言ってることが変わってる？」
「うふっ♪それはそうです♥もう貴方はお客様ではなくslave♥（奴隷）
お世辞なんて必要ないですから♥」

びくっ
びくっ
はあ♡
はあ♡

「実はサラが今日イッたのは全部preigning（演技）なんです♥
それはそうですよ、サラをイカせることができるのは
サラのMaster（ご主人様）だけなんですから」
「お客様…いいえドレイ君には次回までに今日以上の
物資と情報を持ってきてもらいます♪そうしたらご褒美もちゃんとあげますよ♥」
「サラを裏切ろうとしても無駄です♥ここに入る時の条件を見ましたよね♥
もし裏切ろうとしたら…」
「でもこのpreigning（演技）サラのslave（奴隷）でいる限りちゃんと可愛がってあげますから♥」
「それでは次回もちゃんとサラを指名してくださいね♥
サラのCastomer（可愛い奴隷ちゃん）」
クスクス